

やすらぎ



「歎異抄」(第五十一回)

樫 暁 講述

「歎異抄」 後序 続き

と御述懐(ごじゆわい)そうらしいことを、いままた案(あん)ずるに、善導(ぜんどう)の、「自身(みづかみ)はこれ現(いま)に罪惡(ざいあく)生死(しじ)の凡夫(ぼんぷ)、曠(こう)劫(きやく)よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転(りうてん)して、出離(しゆり)の縁(えん)あることなき身(み)としれ」(散善義(さんぜんぎ))という金言(きんごん)に、すこしもたがわせおわします。 (真宗聖典(しんそうせいでん)六四十頁)

仏(ぶつ)の願心(がんしん)というのは、宿業(しゆくごふ)の身を自覚(じかく)者(もの)たらしめようとする。そういうことを思(おも)いたれた。これが五劫(ごきやく)思惟(しゆい)の本願(ほんがん)なのだと親鸞(しんらん)聖人(せいじん)は受け止(と)められた。「かたじけなさよ」と、自分の身(み)の上に一心(いっしん)に頂(たの)かれた。それを度々(たびたび)仰(おほ)せられ

たのは、人に聞(き)かせる為(ため)ではなく、自分の深く感(かん)ぜられたことをいつも縁次(えんじ)第(だい)で言葉(ことば)として仰(おほ)つていた。「御述懐(ごじゆわい)そうらしいことを」とはそういうこと。唯円(ただい)大徳(だいとく)は親鸞(しんらん)聖人(せいじん)のつねの仰(おほ)せを聞(き)かせて頂(たの)いていたのです。聖人(せいじん)が亡(な)くなられて三十年経(けい)つて改めて思(おも)い出(で)させて頂(たの)き「御述懐(ごじゆわい)そうらしいことを」と、今(いま)、また案(あん)じている。師匠(しせう)と弟子(でし)の関係(かんけい)が伝(つた)わってくる。親鸞(しんらん)聖人(せいじん)は善導(ぜんどう)大師(だいし)の二種(にしゆ)深信(しんしん)を「信巻(しんまき)」に引用(しゆよう)しておられる。その善導(ぜんどう)大師(だいし)の原文(げんぶん)は、「自身(みづかみ)は現(いま)にこれ」と書いてある。ところが、唯円(ただい)大徳(だいとく)は「自身(みづかみ)はこれ現(いま)」と順序(じゆんじゆ)を変(か)えて書(か)いている。また、原文(げんぶん)では、「常に没(めつ)し」を「つねにしずみ」と変(か)え、「出離(しゆり)の縁(えん)

光照寺寺報

発行所

真宗大谷派 弘興山
宗教法人光照寺

〒331-0821

さいたま市北区別所町102-2

電話：048-651-2781代

FAX：048-651-2753

E-mail

yasuragi@beige.ocn.ne.jp

ホームページ

http://koshoji76.jp

発行人 池田孝郎

ることなしと信ず」を「出離(しゆり)の縁(えん)あることなき身(み)としれ」と善導(ぜんどう)大師(だいし)のお言葉(ことば)を少し変(か)えてある。これは、主(しゆ)体的(てき)了解(りやく)というのです。知(し)るといふのは、信(しん)知(ち)せよということ。我(われ)々の知(ち)性(せい)でものを知(し)るといふのは違(ちが)う。読(よ)み方(か)を変(か)えたのは読(よ)み違(ちが)いではなく、また、記憶(きおく)違(ちが)いでもなく、よく考(かん)えられて変(か)えたのではないか。「これ現(いま)に」というのも強調(きやうてう)する意味(いみ)で、書(か)いたのではないかと我(われ)々は受(う)け取(と)ることができ

る。金言(きんごん)というのは、永遠(えいゑん)普遍(ふぱん)というもの。時代(じだい)を失(うしな)つたら価値(かち)を失(うしな)うような言葉(ことば)ではないこと。この機(き)の深信(しんしん)のお言



総会 婦人有志合唱



総会 佐々木先生ご法話

葉(は)は、時代(じだい)が変わ(か)っても読(よ)めば領(りやう)ける。「自身(みづかみ)は現(いま)にこれ罪惡(ざいあく)生死(しじ)の凡夫(ぼんぷ)、曠(こう)劫(きやく)より已(い)来(き)、常(じょう)に没(めつ)し常に流転(りうてん)して、出離(しゆり)の縁(えん)あることなし」と信(しん)ず。(聖典(せいでん)二一五頁)阿弥陀(あみだ)如来(にがて)の本願(ほんがん)に遇(あ)わなければ、我(われ)々は救(きう)われるというきつかけがない。自己(じこ)肯定(けいてい)の生活(せいかつ)だけしか知らない。そういう私達(わたし)に今(いま)から千数百年(せんすうへん)前に自覚(じかく)を呼(よ)び覚(さ)まして下(くだ)さっている。素晴(すは)らしい言葉(ことば)というの、時代(じだい)を超(こ)えて発揮(はつぎ)する。そういうのを金言(きんごん)という。

〔当寺(とうじ)〕ご法話(ごほふだ)抜粋(へつすい)要約(ようやく)、文責(もんせき)副住職(ふしゆくしやく) 釈徹照(しやくてつしょう) 次回(きらい)へ続(つづ)く

報恩講十月八日(日)午前十一時厳修

護持会総会報告

子供会報告

詳細は三頁

詳細は四頁

詳細は五頁

無碍光

一凡夫が仏になる法一

住職 池田 孝郎

今回は「この世に何をしにきたのか」の問いに尋ねましたが、この度は「出世本懐」に問い尋ねてみたいと思います。

今年は戦後七十二年であり、私は今年七十五歳の後期高齢者になり、戦争中に生を享け、二歳、三歳の戦争の記憶があります。その記憶で鮮明なのは、長兄が出征して行った時、私は二歳。長兄がガリガリに痩せて復員して来たのが三歳でした。六人兄弟の末子として戦争中に生を享けたのも、「産めよ 増やせよ」の時代背景があったからでしょう。

その後の戦後の状況は、食べるものも、着るものもままならず、記憶は鮮明に焼き付いて忘れることはありません。幼少より「男子の本懐は」という言葉を聞かされ、いつしか「男とは」と自問する様になり、武士道の鏡とされる「葉隠」の言葉として、「武士道と云うは、死ぬ事と見付けたり。」に出会う。死して悔いのない「いのち」とはの問いが私の命題となつて歩むこととなる。「大死に」はしたくない。「この事一つ」に命を懸ける使命の発見は苦難の旅となる。しかし、よくよく考えてみると、人は皆「この事一つ」の発見の旅人とも思えてならない。

清沢満之師は、「天命に安んじて人事を尽くす。」と言い換えて表現された。「天命に安んずる」とは、自己を超えた「大いなるもの」を感得したるものの安堵の境地でありましょう。無論、清沢満之師の「天命」はお釈迦様の覚りの世界に見出された言葉であり、「絶対他力の妙用」に表現される「弥陀の本願力回向」のはたらくに目覚められたものです。

この現実世界を仏法では「娑婆界」と示し、悲しみ、苦しみ多い

世界であります。「浄土」は本願が大地となり、「一人漏らさず救う」と誓われる阿弥陀如来の誓願力であります。今、ここにはたらいて下さっております。

このことを鈴木大拙師は、「浄土が娑婆に映る。娑婆が浄土に映る。相い映じ合う。」といわれました。この娑婆界に於て、この我が身に於て「如来まします。」を感得する。

お釈迦様がこの世に出られた「出世本懐」は『大無量寿経』に、「世に出興したまう所以は、道教を光闡して、群萌を拯い恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。」として、本願をお説きになられました。その本願のお心を撰取不捨の真言」と申します。だれ一人漏れず救うと誓われる如来様の本願力であります。

「この事一つ。」を求め歩む人生に於て、お遇いすべきは「弥陀の本願」でありました。

本願に遇わずば自らも助からず、共に助かる世界はこの娑婆にはどこを探してもあり得なかったものであります。

そのことを「無量億劫に値いたてまつること難く、見たてまつる

こと難し。靈瑞華の、時あつて時に乃し出ずるがごとし。」とお釈迦様の「出世本願」を述べられ、親鸞聖人は、「ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、真実の淨信、億劫にも獲がたし。」と示されている。末代に伝えんと欲う。

真の依り処

信仰は先人のことはの世界に浸ることでなく単に領き納得する事でもない。浄土とか、愛とか、言葉はまやかしのだがそれによつて生きなくてはいけない。人は時と場所により個々別々であるが他人と同調したいと思う。人間は他人と一緒にないと困るが、しかしそれだけではない。仏教は独立者になる事だと。心が痛い、うつく、しかし誰でも気づく事がない。生きることは自分が命をかけているんな模様をおりなすのだ。その人の生きた心を感動ではなく、自分の生活で体験実証してこそ信を得たと言えるのだと思う。解釈は駄目、聞いて納得も駄目、体験で言わないと。議論ではない、理性は感情である。感性は言葉を超える。我を目覚めさせて智慧の目を開いて下さることが信仰なのでしょう。

岡田ノリ子

【報恩講は宗祖、親鸞聖人のご恩徳に報謝し、いのちの道理を深く尋ねる法要で、一年の中で最も大切な仏事です。真宗門徒として必ず勤める法要であり、光照寺の今年度最後の大きい法要ですので是非ともご参詣下さい。】

本年は田代俊孝先生（同朋大学大学院教授、行順寺住職）をお迎えして報恩講を厳修致します。先生は大学のご教授とお寺のご住職

として活躍されながら、ビハール医療団の代表を勤められ、真宗が現代と向き合い、尚且つ、医療との関わりを持つ中で聞法し、医療の現実の課題から仏教と医療が互いに生死を超える道を求めている活動をされておられます。

皆様とともに報恩講を勤めて参りたいと存じます。

ご家族、縁者お誘い合わせの上、是非とも奮つてのご参詣をお待ちしております 副住職（釈徹照）

ひとくち 歎異抄

羅漢：釈尊の出世の本意は。
「弥陀の本願まことにおわしまさば、
釈尊の説教、虚言なるべからず。」
第2章



「弥陀の本願をもって、悩める一切の衆生を救う二尊の御約束です。」

川越喜多院の五百羅漢

報恩講

- ・ 10月8日(日)
- ・ 午前11時～3時まで（10時30分受付）
- ・ 場所 光照寺本堂
- ・ 日中法要厳修
- ・ お斉（お食事）
- ・ 法話 田代俊孝先生（同朋大学大学院教授、行順寺住職）
- ・ 講題 「悲しみからの仏教入門」

※準備の都合上、出席の際は、一週間前にはお寺にご連絡下さい。

先生よりメッセージ：

身近な人の死はとても悲しい出来事です。でも、身近な人の死であればあるほど、死はより自分事として受け止められます。「自分の死」を考えてみてください。誕生の瞬間からいつ死んでも不思議でないのちであると知らされます。そうすると、今生きていることが不思議に思えてきます。また、明日あるともわからないのちであると知らされます。そうすると「今を生きる」という営みが始まります。さらに、死が思いがけないこと、思いを超えた出来事であると知らされます。誕生も死も不可称、不可説、不可思議であったと知らされます。思いを超えた「絶対無限の妙用」に生かされていたのです。本願に目覚めた生活の始まりです。「自分の死」を見つめると価値観が変わるのです。

最近の先生の書著：

「生と死を考える」—ラジオ深夜便—（ビハール医療団）。人生の終末期をどう過ぐすか—ビハール医療団の願い—（ビハール医療団）。親鸞思想の再発見（法蔵館）。他多数。



お盆 同朋唱和



お盆 住職ご法話

護持会総会報告

淡海 雅子

平成二十八年度第十八回光照寺護持会総会が六月十日十時から光照寺本堂において多数の参加者と共に開会されました。

勤行（正信偈同朋奉讃）に引き続き、婦人部の皆様と共に仏教讃歌「真宗宗歌」・「恩徳讃」・「光はみちて」を唱和しました。

法話はいずみ会館館主佐々木玄吾師に『蓮如上人御一代記聞書』より、「ただ仏法は聴聞にきわまることなり」と題してお話を頂きました。信心を得る事が仏法の成就である。それは自分の姿が仏法によって照らし出されることであり、そのためには聴聞をすることである。信を得た者も未信の者も共に生活の中心は聞法にきわまると聴かせて頂きました。

総会は佐々木玄吾氏を議長に議案に入り、前年度護持会の活動実績及び、護持会収支決算と監査が報告され全会一致で承認されました。新世話人として山根外茂次氏が就任され、会計監査は川澄英明氏の逝去につき、新たに南袈婆雄氏が承認され挨拶がありました。庶務の片山真紀氏は退任されました。



護持会総会の様子

今年度活動計画案及び、今年度収支予算案が提案され、いずれも原案通り可決承認されました。続いて、副住職様より年間行事、聞法会の紹介、サークル活動の案内と参加の呼びかけ、大塚氏より子供会「ポニークラブ」の紹介がありました。光照寺旅行は十一月十二日に「親鸞聖人「一切経」校合



委嘱状授与 南氏



委嘱状授与 山根氏



マジック11の皆様



絵解きサークル発表

の足跡を訪ねて」鎌倉小田原への日帰り旅行を企画しております。御住職様より挨拶を賜りました。光照寺の歴史と護持会の設立の経過を振り返り今後の展望を語られました。また口伝抄の一切経校合に関するお話を頂き、本願力回向の視点からお話を頂き、堂々と生きていけるということを親鸞聖人が肉食妻帯で示されたと同じいました。続いて新役員に委嘱状が授与されました。

総会終了後、お斎をいただきながら感話と初参加者の自己紹介がありました。引き続き絵解きサークルによる「赤尾の道宗」の絵解きがあり昨年度の光照寺の旅行を思い出しました。その後、「マジック11」によるマジックに見入りました。



マジック発表

子供会報告

子供会「ポニークラブ」
工場見学 喜多山製菓

坊守 池田 邦子

八月二十二日(火)天候に恵まれ?猛暑の中、大人十一名、小人六名の参加を得て、子供手帖による勤行に始まり、同朋新聞キッズの新しい誕生日を読み紹介しつつ

お盆冊子を読み、昼食にカレーとデザートをいただいて、大成町の工場見学へと向かう。片岡社長さんから懇切丁寧に説明を受けた後案内をされ、ビニール帽子をかぶり、エアershowerを浴び、ガスの熱風で焼き上がったばかりのおせんべいを食す。格別でした。五十度近くの中で作業をしている方

に脱帽、手焼き体験もあり、家族へのおみやげも出来ました。寺に戻り、喉を潤し紙芝居を陽子さんが読んでくれました。貴重な体験が出来た一日でした。次回は十二月二十五日(月)を予定しています。ご参加をお待ちしております。合掌



本堂にて



喜多山製菓にて



カレー美味しいね



絵本は楽しい



お盆を学んだよ



アイスもおいしい



おせんべい焼いてみたよ



おせんべいの焼き工程見学

お知らせ

寺務所より

◆法要のご案内

●報恩講 十月八日(日)午前十一時より厳修。講師は田代俊孝先生(同朋大学大学院教授、行順寺住職)

●修正会 平成三十年一月一日元旦、午後一時より厳修。新年を阿弥陀如来のご尊前より出発致します。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会
講師は延塚知道先生(大谷大学特別任用教授) 十一月二十七日、平成三十年一月十二日、三月二日、午後一時半～四時半。『教行信証』を学んでいます。

●大経の会

十月十四日、十一月二十六日、十二月十日、午前十時～午後三時まで。講師は佐々木師と住職の担当月別。『正信偈讃仰』(六)を学んでいます。お弁当持参して下さい。

●我聞の会

十月三十日、十一月二十一日、十二月二十日、午後二時～四時まで。

「真宗の簡要」(住職著) サブテキスト「無量寿経に聞く」(松原祐善著)。「無量寿経に聞く」(下巻)(延塚知道著)を学んでいます。講師は住職。

●微風学舎

毎月開催。午後七時～九時まで。講師は副住職。「顕浄土」の教学、親鸞における現生不退の視座(副住職著) サブテキスト「今日のことば」「真宗の生活」を学んでいます。十月二十四日、十一月六日、十二月五日。

◆さいたま親鸞講座

午後二時～四時。会場は大宮川鍋ビル。平成三十年一月十三日、二月十七日。講師は四衢亮氏。

◆真宗に学ぶつどい(埼玉組主催)

十二月二十一日(会場、了善寺)、平成三十年二月二十三日(会場、大聖寺)、午後一時三十分。講師は本明義樹氏(教学研究所)。

◆お願い

ご自宅で法事の際は駐車場をご用意下さい。
住所・電話番号変更の際は必ずご連絡下さい。宜しく願います。

俳句・川柳



吉澤 光昭

案山子をも村人口に数へけり
新薬に戯れ呼ばれいずは知らず
試走路や背中に行け受く秋最中
秋拾今年形見となりにつけり

山田 恒

空蟬に喜怒哀楽が溢れてる
残り火がAIの夢追つてます

短歌(詩)

佐々木玄吾

光照寺の広き境内その奥の
愚庵に如来生きてまします
本堂より駐車場へ聖人像
西の坊・愚庵と案内賜う

赤秀 品枝

今会いし友との会話をつけないし
アルツハイマー我に近づく
不登校の孫を思いて泣く友に
差し出す手だて我になかりし

鈴の音

絶望に立ってはじめて
一歩が出てくる

長川 一雄

〔人間の深み―本願成就―より〕



石榴
山田 邦興 画

梵鐘

思い通りにならない事
体力には限りがあつて、行きたいと思つても、やりたいと思つても、出来なくなるから、そう言われてもそれが今日や明日ではないように思い、気力も体力も思うようにならなくなるのは、ずうっと先の事と思つていたら、年には勝てないものだと思つて毎日のように感じるようになった。「無理をしないで、身体を大切にして下さい」と言われるようになり、「心配をかけているな」と身の程を知らされる。氣をつけているのにころんで、心が動揺して何も考えられず、落ちつくのに二日もかかり失敗してしまつた、氣をつけます。

釈尼民徳
合掌